

## 第 10 分科会

### 園行事の取り組みと子どもの育ち

問題提起園 白百合幼稚園

問題提起者 高橋 美和

#### 【研究課題】

保育実践

#### 【研究・研修の視点】

白百合幼稚園では、モンテッソーリ教育を実践している。もっとも特徴的な事は、異年齢の混合クラスを採用し、各自が五領域ごとに配置された教具を自ら選んで活動する点である。これを「お仕事」と呼んでいる。子どもの成長に欠かせない活動という意味合いがある。自分で選び、選んだ作業を最後までやり遂げることで人は達成感を持つことができる。この達成感こそ人の知的・人格的成長には欠かせないことのできない基本的な生活体験と言える。クラスで目指しているのはこの達成感。

もう一つの特徴は、年長の子どもは「お世話係」となって小さい子どもに同伴することになっている。集団で行動するときには二人一組になる。こうして他者に心を配り、助けを必要としている人への素早い援助の心が育つようにと期待されている。

今回の研究の視点は、主に第一の点、つまり子どもたちが様々な行事と取り組むことで、どんなふうに達成感を持つことができたかという点に絞ることにした。

#### 【主な研究・研修の内容と計画】

- 1 一年を通しての行事が子どもたちにとっていかに魅力あるものであるか、また、子どもの発達段階とどのような関わりを持つかを考えてみる。
- 2 行事への取り組みが子どもの人格形成にどのように関わりがあるかを考える。
- 3 幼児期は個の育ちから徐々に周りの子どもの存在を意識し、遊びや様々な活動を通して、自分と他者の違いに気づく時である。思いやりを持ち、共に成し遂げる過程を考える。

#### 【研究の概要】

##### 1 研究・研修のテーマのとらえ方

本園は、強い手・強い足・強い心をモットーに ①自分のことは自分でできる子ども ②静と動のけじめがつく子ども ③わがままに負けない子どもをねらいに定め、指導案を作成し日々の保育に取り組んでいる。各行事を通して子どもたちがどのように育っていくかを考察していきたい。

##### 2 研究の内容

子どもの発達段階に応じて学んだ知識や体験がどのように生かされ、主体的な活動に結びつくのかを考える。

### 3 研究の方法

- (1) 毎日その日の出来事や子どもの様子を伝え合い、職員の共通理解を図る。
- (2) 子どもたちの園行事に関する興味・関心やそれに伴う言動の変化を中心に研究を進めていく。

### 4 実践例

#### 実践 (年間の主な園行事のまとめ)

		年少児 (3歳児)	年中児 (4歳児)	年長児 (5歳児)
1 学 期	8月  お泊り保育			1泊2日。初日は不安を隠しきれない表情。翌日は「楽しかった!」と満足した顔を見せた。こうした行事を重ねて、少しずつ成長していく。
2 学 期	9月  運動会	運動会は、どの子にとっても楽しみでもあり最大のハードルでもある。		
		<u>出場競技</u> かけっこ 障害物競走 おゆうぎ	<u>出場競技</u> かけっこ 障害物競走 バルーン	<u>出場競技</u> かけっこ・障害競走・組体操他 <u>役割</u> 開会・閉会のことばやお祈り、体操や行進の先頭で全体をリードする。
		<u>実践例 1 参照</u>		
	10月  持久走	年少児 グラウンド 450m	年中児 道路 750m	年長児 道路 1000m
		* 毎朝登園時に園庭のトラックを自分の体力に応じて走り、持久走に備える。強い足、強い心で完走を目指して欲しいが、負けたくないという競争心が芽生えてくるものの自然な流れである。これも成長の一つの姿かもしれない。		
	10月  マリア祭	<u>実践例 2 参照</u>		
	12月  クリスマス会	年少児、年中児  おゆうぎ一人一曲		年長児 おゆうぎ一曲+聖劇 セリフとふさわしい表現と大きな声が求められる
		<u>実践例 3 参照</u>		
3 学 期	2月  音楽会	<u>実践例 4 参照</u>		

## 実践例 1

### ☆運動会☆

運動会で年長児に一人一役を担当してもらうことにした。年長児 30 名。開会宣言・お祈り・体操・クラス旗を手に先頭でリードする役・・・様々な役を作り実施した。子どもたちは見事にやり遂げてくれた。誇らしく満足感と自信に溢れた顔は素晴らしかった。

運動会後の変化の例を一つ記すことにする。例えば水曜日の体操の時間。「今日は、先生の代わりに誰がしてくれますか？」の問いかけに、一斉に年長児の手が挙がり、体操のリードを務めるようになった。もちろん、引っ込み思案な子どもはいるとしても、保育者が素早く側に立ち声をかけることで、みんなの前に出てできるようになる。これを繰り返しているうちに不安も取れ自信が持てるようになってきた。

3学期になると、年中児が前に立ち、それを年長児が支える側にまわる。サポートしたり教えたりすることによって年長児としての自覚も増すことになる。こうしたやり方が、今ではしっかり定着してきた。

この頃になると運動会の時だけではなく、普段の保育室での集まり・朝と帰りのお祈り・名前呼びなど子どもたちが交代で、自主的にできるようになった。この体験は今後の行事で大いに生かされることとなる。



## 実践例 2

### ☆マリア祭☆

カトリック教会では 10 月をマリア様の月と呼んでいる。愛の教えのもと豊かな心が育つようにと毎日のお祈りを大切にしている。特に 10 月は、子どもたちにもよい行いやお祈りを推奨し、愛の花束としてマリア様にお捧げすることになっている。

各部屋の祈りのコーナーには「祈りのカード」が置いてある。このカードには、輪になった 10 個のバラの花が描かれていて、何かよい事をした時や誰かのために祈った時、また自分もつと頑張れるようにと願って祈った時に好きな色を塗ることになっている。10 個塗り終わったら新しいカードが補充される。これは年間を通じてなされるので一人で何枚にもなることもある。

こうして集められた「祈りのカード」は 10 月のお御堂でのマリア祭でクラス毎に捧げられる。各クラス年長児による初めのお祈りに続いて各自がそれぞれのカードを捧げる。「家族やお友達が仲良くなれますように」「弟がもっといい子になれますように」「自分がもっといい笑顔になれますよ

うに」など。子どもたちのお祈りは純粹で心打つものがあり考えさせられることがたくさんある。  
司祭の祝福をいただき聖歌を歌って終わる。静肅さの中で運動会とはまた違った子どもたちの成長の一面をみることができる時である。



### 実践例 3

#### ☆クリスマス会☆

クリスマス会は、第1部のおゆうぎと第2部の聖劇からなる。中心は「イエス様のご誕生」を祝う年長児による聖劇である。「イエス様、マリア様、おはようございます。」と毎日手を合わせるイエス様やマリア様の役は、博士や兵隊とともにみんなの憧れである。

1学期、神様のお話の時間を通してお祈りやイエス様、マリア様に親しみを感じてくる。

11月になると、クリスマスに向けての具体的な方向付けをしていく。「なぜイエス様を救い主というのか?」「どうして馬小屋でお生まれになったのか?」「クリスマスの意味はなにか?」と一緒に考えていく。担当者が丁寧に話すことで、子どもたちも真剣になる。

聖劇をするということは、神様について、クリスマスの意味について、お父さんお母さんやみんなに劇を通して教えてあげることだからどの役もみんな大切である。子どもたちは憧れる気持ちはあるとしても、どの役でも一生懸命しようという気持ちに変わる。こうして次々と配役が決まり本番に向けての練習が始まることになる。

長いセリフ、短いセリフ色々あり覚えるのも大変な上に動きをつけて大きな声を出すことは容易ではない。しかし、誰一人音を上げる子どもはいない。それどころか、「以前のビデオを見たりして家でも役作りを頑張っている」という声も届くほど意欲的になる。全6幕、子どもたちの努力と頑張りは大きい。中にはなかなかセリフを覚えられない子や声の小さい子、周りの動きに乗れない子どもがいたりする。そのような時一緒に覚えたり、教えたりできる子どもがいることも大きな喜びである。このような姿に人格の成長を見ることができるよう思うからだ。

こうして、緊張の中にも無事に大役を果たし終えた本番後のカーテンコール。子どもたちのホッとした思いと喜びと満足した顔こそが達成感を実感していると言えるのではないだろうか。

### 実践例 4

#### ☆音楽会☆

3学期は何といっても音楽会。年齢別の合唱・合奏・手話歌など保育者は趣向を凝らす。

カスタネット、鍵盤ハーモニカ、楽器……。一年を通じて行ってきたことの発表会である。年長児は自分で楽器を選び合奏に向けて準備をする。引っ込み思案なN君が選んだのは、シンバル。

しかも一人だけだった。不安そうな顔で叩いていたN君に、「自由に叩いていいよ」と保育者が促したことで、安心したようだった。練習を繰り返すうちに、緊張感もほぐれ、みんなと音やリズムを合わせることで楽しさを味わえるまでになった。そして、全体合奏の時は、リズムの柱となって堂々と演奏する姿が見られた。仲間意識と自宅での練習もあって、お互いに支え合い、励まし合い、そうして苦手な子どもでも自分のパートができるようになっていった。このような一つ一つの積み重ねが、一人の人間としての人格を育てる土台となると考える。またそれは、子ども一人一人の自信と誇りとなって次のステップへの原動力となる。

## 5 まとめ

子どもたちの成長に行事は欠かせない。子ども一人一人の成長過程の差は大きい。年齢が低いほどその違いも大きい。保育者はこのことをしっかり踏まえたうえで準備する必要がある。つまり、年齢に応じて秩序づけられた計画と実践が求められている。

子どもたちは、自分なりの課題に直面し、繰り返し挑戦することで、自信を得て、達成感を味わうことができた。何よりも子どもたち自身の中に変わる力が備わっていることに気づいたのは大きな喜びであった。

## 6 今後の課題

一人一人の子どもの成長の過程をしっかり捉え、その育ちを大切に保障していける保育を心がけ、明日へつながる保育の質の向上に努めていきたい。

